

大瀬甚太郎の教育史学の形成

本谷 一輝

1. 課題と方法

「教育学の父祖」と仰望された大瀬甚太郎(1865~1944)は、教育学(説)史研究において2つに評価が類別される。第1は、『教育学』(1891年)に意義を認めて「教育学体系の定礎者」として位置づける吉田熊次、海後宗臣、稲垣忠彦らの評価。第2は、『欧州教育史』(1906年)や『続欧州教育史』(1907年)に真価を求めて「西洋教育史研究の開拓者」として位置づける乙竹岩造、石山脩平、梅根悟らの評価である。「帝大派」と称された東京大学関係者たちが前者を、また「茗溪派」の東京文理科大学関係者たちが後者を支持するという違いが見られるが、本研究の主眼は、そうした二系譜の教育学の発展の歴史をたどることで、かつての正統派“論争”に決着を付けようとするものでもない。

大瀬の研究領域は教育学や教育史にとどまらない。帝大大学院時代においては心理学を専攻し、東京高等師範学校においては心理学科主任として『心理学教科書』(1907年)や『教育的心理学』(1913年)などを書いていた。このように大瀬には「教育心理学の構築者」という横顔が存在するのである。

彼は常に歴史と対峙していた。研究課題が時間の経過とともに、教育学体系の構築から教育史学の確立へ、さらに教育心理学へと推移したのは、わが国が抱える諸問題との対決を通じて学問研究を進めていく大瀬のこうした立場ゆえであった。かかる問題関心の発展の相を念頭に置いて、「教育学者」大瀬甚太郎の思想を統一のかつ連続的に明らかにしようとするのが、本研究の最終的な目的である。

この中間評価論文では、その第一歩として、大瀬の初期の展開とりわけ『教育学』から『続欧州教育史』までの展開に着眼して、「教育学体系の定礎者」がいかにして「西洋教育史の開拓者」になったのか、一生の学として選ばれることになる教育史学が大瀬においてはどのように形成されていったのかに論点をさだめ、

そのプロセスを明らかにすることを目的としている。また本研究では、時事問題への対応の中で生じた大瀬の教育学的感性や思惟様式の変化を見るために、従来の教育学史研究ではあまり注目されてこなかった雑誌記事を中心に据えて分析した。

2. 論文の構成

序 章 研究の目的・内容・方法

第一章 『教育学』と帝大時代

第一節 『教育学』のミッシング・リンク

第二節 学友と教師

第三節 特約生のハウスクネヒト、帝大生のハウスクネヒト

第四節 『教育学』の周辺

第五節 『教育学』の遠近法

第六節 まとめ

第二章 嘉納治五郎 —大瀬教育学のパトロンとしての—

第一節 就任経緯の検証

第二節 嘉納の高師、大瀬の教育学

第三章 教育史学の形成

第一節 欧州教育談

第二節 学としての教育

第三節 教育史学の形成

第四節 『続欧州教育史』のライトモチーフ

終 章 今後の課題

付録1 大瀬甚太郎雑誌記事一覧

付録2 日本の西洋教育史書の目次（明治大正期）

3. 論文の概要

第一章は、「教育学者」以前の大瀬甚太郎の実相を、『教育学』出版の母胎となった帝国大学時代の社会的思想的文脈を考慮して明らかにした。3つの問題を設定

した。①大瀬はどのような大学時代を過ごしたのか。どのような人物の、どのような授業に影響を受けたのか。②なぜ大瀬はハウスクネヒトの講義やヘルバルト派の教育学に興味を抱かなかったのか。③大学院で教育学を専攻しなかった大瀬が2年後に『教育学』を出版したのはなぜか。その内容はヘルバルト学派のものだったのか。

以上の目的および課題の設定には、帝大でのハウスクネヒトの教育学講義とそこで紹介されたヘルバルト派学説の影響を過大視して、それを緒にわが国の教育学史の展開を描く先行研究に対する批判がこめられているが、何よりも、大瀬の『教育学』の教育学説史上の位置を見極めるためにも、それらは不可欠な作業であった。分析の結果、以下のことが判明した。

帝大入学以前にミルやスペンサーらの書を読み、明治10年代の「自由民権」思想を吸収していた大瀬は、東京大学予備門および帝大時代をとおして当時台頭しつつあった「官権」思想に随順することはなかった。授業の大半が英語で行われていたこともその一因だが、彼が帝大時代、外山正一（スペンサー社会学者）や元良勇次郎（米国留学帰りの心理学者）から学問的薫陶を受けたことが大きく作用している。哲学科を卒業して大学院に進み、そこで彼が専攻したのは、通説で前提とされて指摘されている教育学ではなく、心理学であったのも、元良の影響が大きい。ドイツ人教師が「御雇」されアカデミックな土壌が調いつつあった当時の帝大において、ハウスクネヒトは単なる一ドイツ語教師にすぎなかったのである。したがって、ハウスクネヒトの教育学講義に参加した帝大「本科生」の反応は、卒業後教職に就くことが義務づけられていた「特約生教育学科」の学生たちとはまるで異なり、ときに否定的でさえあった。哲学科3年次に受講した本科生大瀬甚太郎もその眼差しを共有している。

後年、大瀬はハウスクネヒトの講義に「多少疑惑を感じながらも、興味を感じた」と言う。この「疑惑」と「興味」が彼の『教育学』には影を落としている。ヘルバルト教育学の体系性に覚えた「興味」は、『教育学』に学問的構成を付加した。しかし『教育学』がオリジナリティのあるものとして価値を高めることになったのは、むしろ大瀬の「疑惑」であった。『教育学』にはハウスクネヒトが講義で使用した文献は全く取りあげられておらず、また、ヘルバルトへの言及はわずか

3カ所であった。『教育学』の内容には英米系の教育思想（すなわちスペンサーやペインの著作）に依拠する箇所も少なくない。これは「ハウスクネヒト門下生」の翻訳一辺倒の教育学活動とはきわめて好対照であった。要するに大瀬は、ハウスクネヒトの教育学講義を反面教師にして『教育学』を執筆し、英米（教育）思想のドイツ教育学による体系化を『教育学』の基本設計としたのだった。

『教育学』出版は大瀬26歳の時であるが、彼がその元となる雑誌連載に着手するのは、その2年前であった。当時大学院生であったこの若者に、金港堂はどうして執筆を依頼したのであろうか。その遠景には、文相森有礼の改革による中等学校の整備があった。1886年の中等学校令や師範学校令の施行に伴って、「中等」の教科書市場が新たに生まれ、教科書会社は従来の「初等」教科書執筆者とは違う書き手を求めている。執筆者として懇願されたのは、帝国大学の肩書きを持つ学者たちであった。心理学、とりわけ「教育の基礎としての心理」研究を志していた帝大生大瀬甚太郎は、金港堂にとって、まさに好適の教育学執筆者だったのである。

『教育学』出版が機縁となり大瀬は1893年からヨーロッパに留学する。1897年12月帰国。そして翌年の1月に高等師範学校教授に就任。ここから大瀬は以後約40年の長きに亘って学者、大学人としての人生を送ることになる。留学から高師就任、そこでの教育学責任者の職分。それは偶然でもなく大瀬の思惑でもなく、第三者の意志と力が働いていたと考える。それは誰か。大瀬を学問研究へと導いていったものは何か。この解明を試みたものが第二章である。

大瀬の人生を決定づけたのは、決定的証拠を欠くので状況証拠から言えば、高等師範学校校長の嘉納治五郎であったと推察される。1893年9月9日、教育学の未来を託されていた日高真実が肺患のために帝大を辞し、同日、高嶺秀夫が高等師範学校校長を辞職している。同9月13日、嘉納治五郎が高等師範学校校長心得に就任する（同月20日校長に昇任）。大瀬がヨーロッパ留学を命じられたのは、嘉納高師着任のわずか3日後の9月16日であった。1890年代、中等教員、師範学校教員の養成にシフトした高等師範学校は、高師を帝大に比肩しうる学校にするという嘉納のビジョンに支配されていた。嘉納は、日高亡き後の教育学を大瀬に託し、彼を将来高師に迎えることで、この理念の実現を期待した。大瀬のヨーロッパ留

学はその一環として企てられ、大瀬もまた帰国後は嘉納の期待に応じて高師の教育学主任という大任を引き受け、教員養成のための「教育学的教養」の向上を図っていくのである。嘉納の寵遇を地盤にして、大瀬の教育学研究は成立していたのである。

「教育学者」としての名声を確立し、高等師範学校教授の職を得た大瀬の次の課題は、学問としての教育学をより確実で、実り多いものにすることであったが、これを実現するために大瀬が選んだのは、教育史研究であった。第三章は、教育史学の形成にいたるこのプロセスを、3つの段階に分けて検証していったものである。

第1段階として、大瀬がヨーロッパの教育のいかなる点に注目していたのかを、彼が帰国後に語った「欧州教育談」を中心に析出した。要点を整理すると、大瀬は、「自由」を尊びかつ「義務」も忘れないイギリス・ジェントルマンに理想的人間像を見、その育成のための手段をドイツの方法、つまり、教育の「科学」的先進性と、「静平なる事業に従事する」のを厭わない教師の資質に求めた。教育学を学問として志向していく第2段階の萌芽がここに見られる。なお、彼がドイツやフランスの教育的熱意の高揚の契機を「敗戦」という惨劇に求め、またフランスの学校制度のもつ画一性に着目し、中央集権的なその制度の鍵を「義務性」、「無償性」、「世俗性」の3原則に見いだしていたのは、日清戦後ナショナリズムが俄かに高揚していった眼前の時勢を思慮してのことであった。

1900年代に入ると、大瀬は、英独仏の教育風土や制度の紹介から、卓越した教育家の理論の紹介へと重点を移し、教育学の学問的未熟さを強調していく。この第2段階で彼は、教育学は「未だ近代の意味に於ける科学に非ず」というディルタイに共鳴しながら、学的立場を確固たるものにするために、「中等教育の研究」や原典や一次資料にもとづく「根本的研究」が必要であると主張する。そして、倫理学から演繹された教育目標を「空漠」と断じて歴史的考察を通過した目標設定の必要を論じ、他方で、児童の発達段階の普遍性を解明する教育心理学研究の樹立を説いていく。

歴史的 연구를軸に教育学を学問として確立するという大瀬の試みが結実するのが第3段階で、1907年の『続欧州教育史』はその最終成果であった。それは一言

で言えば、大瀬のヨーロッパ留学体験の歴史化である。さらにその歴史化へは、明治30年代の教育動向が視座を提供している。前半部で彼は現在に連なる「欧州」教育の「起源」を19世紀初期の諸議論に求めた。後半部では、ドイツのベスタロッチ主義者（例えばディスターヴェーク）や社会的教育学者の理論発展の足跡を辿ることで、ヘルバルト主義教育学の相対化を企図した。この試みのなかで大瀬は、ヘルバルトに比肩しうるものとしてシュライエルマツヘルに、ヨーロッパ教育思想史上の磐石の地位を授与することになるのであった。

4. 今後の課題

第1、大瀬甚太郎の教育学的評伝の執筆。金沢時代の生い立ちや『続欧州教育史』以後の足跡、とりわけ心理学研究者としての顔を洗い出しながら、さらに欧米教育学の受容と解釈のプロセスを詳らかに調べ、大瀬の思想的営為の全貌を明らかにすること。

第2、大瀬と同時代人および弟子たちとの教育学的相克の解明。大瀬の教育学思想の展開において、同時代人たち（例えば谷本富や澤柳政太郎）との相関関係を無視することはできない。それらはいかなるものであったのか、また大瀬の教育学思想が弟子たちにどのように継承・発展されていったのか。

第3、「教師の教師」（師範学校教員）養成と「中等学校教員」養成という2つの社会的使命を背負う茗溪の学問志向、とくに「講壇教育学」の成立を、同じくアカデミズムを担う（東京）帝国大学との緊張関係のなかで解明すること。

5. 主要文献

- 1) 大瀬甚太郎の主要著作…………『教育学』（金港堂、1891年）、『欧州教育史』（成美堂、1906年）、『続欧州教育史』（成美堂、1907年）、「自伝現代日本教育学 回顧六十年」（『教育』第3巻第1号、岩波書店、1935年）。
- 2) 主要参考文献…………東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史部局史1』（東京大学出版会、1986年）、海後宗臣『教育学五十年』（評論社、1971年）、稲垣忠彦編『教育学説の系譜』（国土社、1972年）、梅根悟「日本の西洋教育史研究の歴史」（『教育史学の探究』、講談社、1966年）。